タネはどこだ

人物

青山春樹（13）

赤城夏美（13）

白崎秋生（13）春樹の友人

黒鳥美冬（13）クラス委員

○星野中学・２年２組

昼休み。

弁当を食べている者、談笑している者。

教室の一角、青山春樹(13)と白崎秋生(13)が顔を寄せ合って話している。

春樹「えーマジかよそれ」

秋生「マジマジ。兄貴が塾帰りに見たって言ってたもん」

春樹「うっそくせー」

秋生「お前オレの兄貴が嘘ついたって言うのかよ」

春樹「そうは言ってないけどよ」

秋生、机を叩いて立ち上がる。

秋生「あーそうかよ、じゃあ確かめに行こうぜ！今夜！」

春樹「えぇ今夜ぁ？」

秋生「今夜！」

赤城夏美(13)と黒鳥美冬(13)が教

室に入ってきて春樹と秋生の元へ来る。

夏美、春樹と秋生の顔を覗き込む。

夏美「なになに？何の話してたの？」

春樹、ちょっと目を逸らす。

秋生「お前ら知らない？３丁目の空き家。幽霊が出るって噂」

夏美「えーそうなの？ホントに？」

秋生「マジ。オレの兄貴が見たって」

夏美「うそー怖ーい。でもなんか気になる。ね？美冬ちゃん」

夏美、笑顔で美冬を振り返る。

美冬、苦笑い。

美冬「ホント男子ってそういうの好きだよね。…まぁ私も興味はあるけど」

秋生「だろ？んで、今夜春樹と一緒に見に行こうぜって話しててさ」

春樹「おい、俺まだ行くって…」

夏美「エー何それ超楽しそう！私も行きたい！ね、美冬ちゃん！」

春樹、驚いて夏美を見る。
夏美「青山くん、私たちも一緒に行っちゃだめかな？」
夏美、春樹を見つめ返す。
春樹、赤面して目を逸らす。
春樹「だ…駄目じゃないけど」
授業開始のチャイムが鳴る。
席に戻り始める生徒たち。
秋生「春樹がいいなら、もちろんオレもオッケーだ！よし、じゃあ今夜9時に現地集合で決まりな！遅れんなよ」
夏美・美冬「オッケー」
春樹「え、俺まだ行くって言って…」
秋生、夏美、美冬が席に戻っていく。
春樹、茫然と秋生たちを見る。
春樹「マジかよ…」

○青山家・春樹の部屋（夕）
春樹、箪笥からリュックを引っ張

り出して懐中電灯とお茶のペットボトルを入れる。
机の引き出しを開ける。ごちゃごちゃと色々なものが入っている中にマッチ箱がある。
軽く振ると数本入っている音がする。
春樹、マッチ箱から中身を出すと何か作業を始める。
マッチ棒を箱に戻し、リュックに詰める。

春樹「…よぉし」

春樹、得意げな笑み。

○３丁目の空き家・全景（夜）

鬱蒼と茂る庭木に囲まれた古ぼけた一軒家。窓ガラスが割れていて、壁がかなり汚れている。
玄関ドアは外れていて中に入れそう。

○同・玄関前（夜）

春樹と秋生が待っている。

夏美と美冬が走ってやってくる。

夏美「ごめん、お待たせ！」

秋生「遅いぞ。何やってたんだよ」

美冬「女子が夜に外出る理由作るの大変なのよ、あんた達とは違うの」

夏美、建物を眺めて嬉しそう。

夏美「うわーやっぱり夜に見ると迫力あるね」

春樹「赤城さん、こういうの好きなんだ」

夏美「えへ、怖いなって思うけど、それよりドキドキしちゃうんだ」

夏美、満面の笑み。

春樹「そ、そうなんだ…」

秋生「よーしそれじゃあ肝試し始めるか！」

秋生、鞄からタバコを取り出し、一本ずつ中身を配る。

秋生「順番に入ってって、一番奥の部屋

にコレ置いてくるんだぞ」

美冬「あんたなんでタバコなんて持ってんの」

秋生「親父のをちょっと借りてきたんだよ」

夏美「えー一人ずつ入るの？ちょっとそれ怖すぎるよぉ」

春樹、サッとマッチ箱を取り出す。

美冬もスカートのポケットに手を伸ばしていたが春樹を見て止める。

春樹「あ、だったら二人一組で行こうよ。ほらこれでクジ引きしてさ。俺作ってきたし」

秋生「なんだよ、昼間は乗り気じゃなさそうだったくせに準備いいじゃん！じゃあそれでいこうぜ！」

春樹、マッチ箱を開けて火薬が付いているものと外したものを見せる。

春樹「赤いのがついてるやつとついてな

いやつ、二本ずつあるから。同じの引いた人同士でチームな」

春樹、マッチ棒を戻して先を少しだけ出した箱を夏美に差し出す。

春樹「はい、赤城さん」

夏美「ありがと！」

夏美、マッチを引く。火薬が付いている。

春樹、続けて美冬、秋生に引かせる。二人とも火薬が無い。

春樹「じゃあ秋生と黒鳥さんがペアだな。残った俺と赤城さんがペア」

夏美「オッケー！頑張ろうね、青山くん」

春樹「う、うん」

春樹、すぐにマッチ箱をリュックに仕舞う。

秋生「よし、そんじゃ決まり。じゃあ最初はどっちが…」

美冬「ちょっと待って」

一同の視線が美冬に向く。

春樹の顔が強張る。

夏美「どうしたの、美冬ちゃん？」

秋生「急に怖くなったとかナシだからな」

美冬「そんなんじゃないよ」

美冬、春樹をジッと見る。

春樹、目を逸らす。

美冬「青山くん、ズルしたね」

秋生「え？」

秋生と夏美、春樹に視線を送る。

春樹「な、なんだよ俺何も…」

美冬「さっきのマッチ箱見せて」

春樹、とっさにリュックを庇う。

秋生「春樹なんで隠すんだよー見せろよ」

春樹「あっ」

秋生が後ろからリュックを取り上げ、中のマッチ箱を取り出す。

箱の中には火薬がついたもの二本とついていないものが三本入っている。

美冬「夏美とペアになろうとしてズルし

たでしょ、コレ」
春樹「う…」
夏美「私と？やだ、照れるぅ」
春樹、真っ赤。
秋生「なんだよ春樹、お前赤城のこと好きだったん？ちゃんと言ってくれれば最初からペアにしてやったのに」
夏美「うん、私別にペアになるの嫌じゃないよ？」
春樹、真っ赤な顔で俯いている。
美冬「だめだよ夏美、こんなズルいことする奴を甘やかしちゃ！青山くん、ズルした罰として、今回は私とペアね。いい？」
春樹「うう…」
秋生「ま、自業自得だな春樹！」
夏美「じゃあ私は白崎くんとペア？早速行こうよ！私早く中入りたい」
秋生「よっしゃ！じゃあ俺たちが先に入るな。お前ら五分後に入って来いよ」

秋生、夏美が賑やかにはしゃぎながら空き家へ入っていく。
美冬、腕時計を見る。
美冬「五分後ね」
次に春樹を見る。
春樹、まだ俯いている。
春樹「あー…俺カッコ悪い…」
美冬「ホント。余計な小細工しないで素直に言えばよかったのに」
春樹「うるせー。そんな恥ずかしいことできるか」
美冬「結局もっと恥ずかしいことになったけどね」
春樹、唇を尖らせる。
春樹「大体お前、なんでわかったんだよズルしてるって」
美冬、得意げに笑って大げさにポーズを取ってみせる。
美冬「男子の単純な思考回路なんて、この黒鳥美冬様にはお見通しなのよ」

美冬のスカートのポケットから何かが落ちる。

春樹「何か落ちたぞ」

春樹、拾い上げる。

それは春樹のものとよく似たマッチ箱。

中の複数のマッチ棒は同じように細工されている。

春樹「え、これって」

美冬、乱暴に春樹からマッチ箱をひったくる。

美冬「返して！」

春樹から背中を向けている美冬。

その背中をポカンと見つめる春樹。

春樹「黒鳥お前、そのマッチ箱…」

美冬「……」

春樹「ひょっとしてお前、俺と同じこと…」

美冬「ち、違うもん私はそんな…！」

振り返る美冬。顔が真っ赤。

春樹「真っ赤だぞ、お前」
美冬、顔を両手で覆う。
春樹、吹き出す。
春樹「ははっおもしれー！同じこと考えてたんじゃ、そりゃすぐバレるよな」
美冬「う、うるさいわね、笑うな！」
春樹「じゃあ、もしかして黒鳥は俺とペアになりたかったわけ？そうじゃなかったら、さっき決まった時文句言う必要ないもんな？」
美冬、顔を隠したまま答えない。
春樹「お前もカワイイとこあんじゃん」
美冬「うるさいうるさいうるさいっ！」
家の方から突然ガタンと音が響く。
微かに秋生と夏美の悲鳴のような声が聞こえる。
春樹「？」
美冬、顔を上げる。春樹、音がした方を振り返る。
春樹「今の音…なんだ？」

美冬「夏美たちの声が聞こえた気がするんだけど…」

真顔で見合う春樹と美冬。

美冬、腕時計を見る。

美冬「…まだちょっと早いけど、行ってみよう。なんかあったのかも」

春樹「そうだな」

○同・玄関ドア（夜）

春樹、外れたドアの隙間から中を覗く。

真っ暗。

春樹「何も見えないな…」

春樹、リュックから懐中電灯を取り出して照らす。

隙間から中に入り、美冬を振り返り手を差し出す。

美冬、その手を取って中に入る。

周囲を照らす春樹。

かなり傷んでいるが、ごく普通の

民家の内装に見える。
物音はしない。
美冬「ねえ…変じゃない？先に入った夏美たちの声が全然しない」
春樹「ああ。大きいって言っても普通の家なんだし、聞こえないほど離れるわけないんだけどな」
辺りを見回しつつ、春樹の服を掴む美冬。
春樹「なんだよ、掴むなよ」
美冬「だって暗くて怖いんだもん」
春樹「懐中電灯無いの？」
美冬「…マッチしか持ってきてない」
春樹「しょうがねぇな…離れんなよ」
美冬「うん」
美冬、笑顔になる。
春樹、ゆっくりと室内を進む。
○同・台所（夜）
春樹が先頭に立ち部屋に入る。

懐中電灯の明かりが廃墟となった台所を照らす。

春樹「秋生ー赤城さーん。いるか？」

照らしながら台所を見回す。

春樹、流し台の上に蠟燭と燭台を見つけて近づく。

春樹「こんなところに蝋燭がある」

美冬「えぇ？」

新品の蝋燭。燭台もキレイな状態。

春樹「黒鳥、これ使えば？蝋燭で明るくなるじゃん」

美冬「こんな不気味なとこにある奴使えって言うの？」

春樹「え、新品なんだから不気味じゃないだろ」

美冬「こんなボロボロの家に新品がある方が不気味じゃない！」

春樹「…そうか…？」

美冬、大きなため息。

美冬「あなたって…いつも落ち着いてて

ステキかと思ってたけど、単に考えなしだっただけなのね」

春樹「何だよその言い方…。まぁいいや。じゃあ俺がこれ使うよ」

春樹、懐中電灯を美冬に渡すとリュックからマッチ箱を取り出す。マッチを擦る。上手く点かず何度もやり直すが点かない。

春樹「あれぇ」

美冬「何やってんのよ。不器用？」

春樹「だってマッチなんか普段使わないじゃん」

春樹、一本目を諦めて日本目を取り出す。

美冬「じゃあなんでマッチ持ってんのよ」

春樹「なんかカッコよかったから、親父からもらった」

美冬、再び大きなため息。

美冬「白崎くんといい…ホント、男って」

二本目でやっと火が点く。

春樹「点いた！どうだ、点いたぞ！」

春樹、喜んで美冬に見せる。

美冬「消えちゃうから早く蝋燭に点けて！」

春樹、慌てて蝋燭に火を点ける。

室内がほんのり明るくなる。

春樹「蝋燭ってすごいな。結構明るくなった」

美冬「ちょっと安心するね」

二階の方から、ゴトンと大きなものが倒れる音が聞こえ、驚いて固まる春樹と美冬。

美冬「今…何か聞こえた」